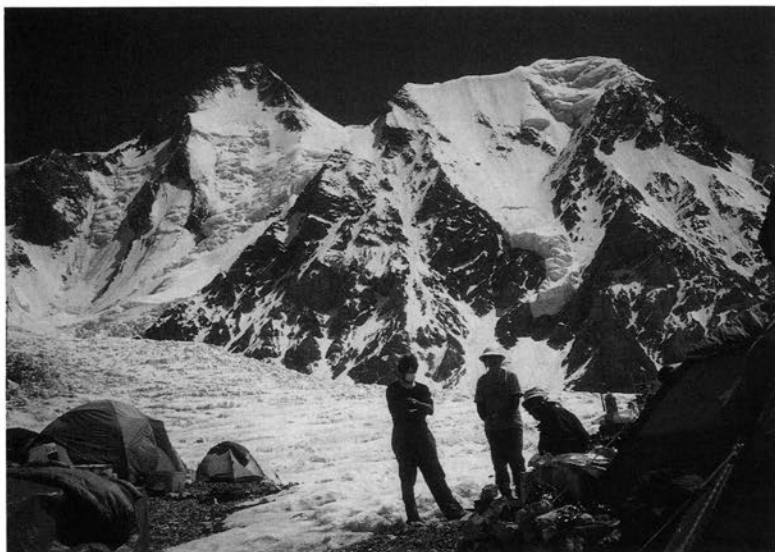


50歳から8000m峰へ ガッシャブルムⅡ峰登頂

シルバータートル隊 渡邊玉枝



BCにて、後方はガッシャブルムⅠ峰



1999 年 (平成 11 年)
3 月号 (No.646)
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目次

ガッシャブルムⅡ峰登頂……………	1
報告	
図書委・第27回山岳史懇談会…	4
データバンク研・本探しもHP	5
丹水会・三国山、湯船山へ……	5
三水会・新年山行、雨降山……	6
海外の山……………	7
わが支部とっておきの一山	
京都支部・芦生の森……………	8
東九州支部・硫黄山……………	9
ネパール山岳博物館募金状況……	9
東西南北	
W・ボナッティ氏の礼状……………	10
同名異本に思う……………	10
オボコンベ山に登った!……………	10
バキスタン、フンザの旅……………	11
憧れのマッターホルンに登る……	11
山日記……………	12
水雲山三ッ峠大権現を捜す……	13
山のイラスト通信……………	14
新入会員・図書受入報告……………	15
図書紹介……………	16
『より高くを求めて』『幻の山・カカボラジ』『丹沢 やまものがたり』『孤独の山』『シェルパーヒマラヤの栄光と死』『山想』	
会務報告・ルーム日誌……………	18
INFORMATION……………	19

▶日本山岳会事務取扱時間
月・火・木……………10～20時
水・金……………13～20時
第2、第4土曜日……………閉室
第1、第3、第5土曜日……………10～18時
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜日を除く毎日……………13～20時

■一歩一歩頂上へ

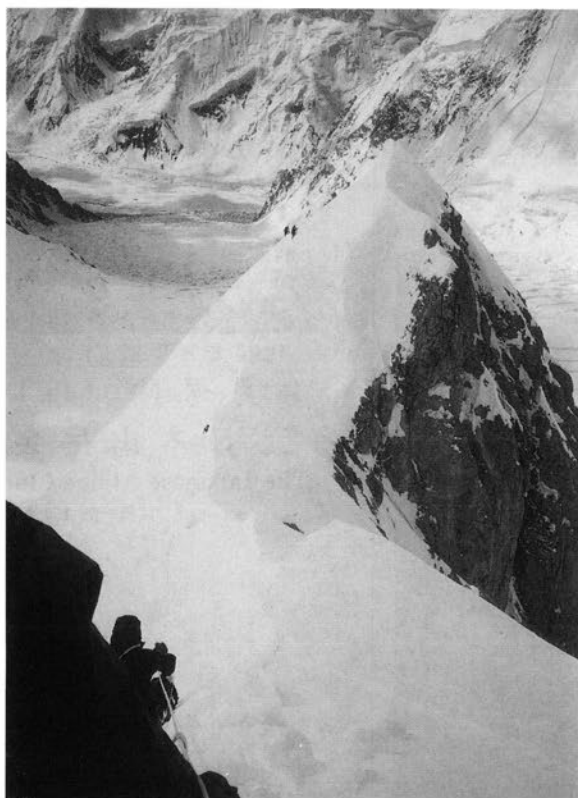
あたりが暗くなるにつれて、C4のテントの周りは荒涼として、異様というか、不気味というか、死者の魂が彷徨っているような雰囲気包まれていた。それは多分、昼間見てしまった遺体のせい、そして撤収されないままに残された数多いテントの残骸のせいだろう。この残骸の下にもいくつかの遺体があるのかもしれない、と思えるような雰囲気なのである。

テントの中に入って、酸素をセツトし、横になるともう外のことは頭から消えて、明日のアタックがうまくいきますようにということだけ、スタート地点からしばらくはラッセルがありそうだが傾斜は緩いし、何とかかなりそう、そんなことを考えているうちに○・五リットルの酸素効

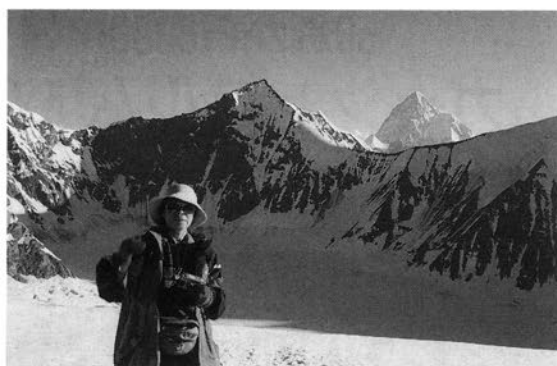
果で眠りに落ちていった。

アタックの朝、身支度を整えてテントから出る。ハイポーターの準備が遅れていて待ちきれずに隊員は一足先に出発、四時二十五分だった。NHKの米山さんがトップでラッセルしてくれる。時には膝以上潜るところもあり、トップはたいへんだ。コルに近づくころ、ようやくハイポーターが追いついてきてトップを交代する。このあたりは風が吹き抜けるため、雪はクラストしていてアイゼンがよくきき、傾斜もきつくなってきた。

コルに出るとしばらくは傾斜が緩くなってまたラッセルとなる。昨日までは不調だった根津さんも今日は調子がよいようだ。根津さんとはチヨ・オユーからはじまって、ダウラギリ、GⅡと三回目の一緒のアタックになる。ぜひ今回も共に成功さ



C2よりC1への下り、ナイフリッジのトラバース



コンドロロ峠に立つ筆者、遠方の山はK2

せたい。

次第に傾斜が増してくるが、まだ膝ぐらいいまで潜る。ハイポーターは傾斜がきつくなつたところから下りを考えて、フィックスロープを張って行く。時々強い風とともにガスも出て、視界が悪くなるが、天候の悪化というほどのこともない。

ハイポーターがトップで登って行く。下からも確認できる大きな岩塔のあたり、このあたりから一段と角度が増す。ハイポーターは直登していく。真上に雪庇が見えてきた。左斜面にフィックスらしきものが見える。「ルートは左、左」と叫ぶが酸

素マスクをしたまま叫んでも声は届かない。ここで後ろについていた村口さんが左斜面のトップに出る。この傾斜は堅い氷、ピッケルもアイゼンもほんの先しか入らない。

村口さんが雪庇を乗り越えて見えなくなった。ハイポーターが続ぎ、さらに石川、森山、渡邊、根津と続く。私も雪庇を乗り越えた。頂上はナイフリッジの一五メートルくらい先か、慎重にたどる。石川さんが、隊長と交信、登頂を告げる。九時だった。

私は預かってきた旗を掲げなければとザックの上蓋を開ける。まず旗に包んできた石を取り出して、山頂に埋める。これは今回のガッツシャブルムの隊長予定だった小西政継さんに、頂上まで一緒に登っていただくとうとベースキャンプから大事に持ってきた石である。そして次ぎは高橋さんから預かった日の丸の旗を激しい風に飛ばされないようにピッケルに結んで掲げた。

頂上は思ったより広い。最終キャンプから四時間半、まだたつぷりと酸素は残っている。頂上からの展望は、残念なことないが雲が多くなつてきて、高い山の頭しか出ていない。中国側はあまり展望がきかない。でもK2はやはり高い。しっかりと頭を出してすぐそれとわかった。

夢中で写真をたくさん撮ったが、後で見ると手袋が邪魔したり、構図がなっていないかったり、酸素を吸っているのに、酸欠状態の写真ばかりだった。

■初めてのヒマラヤ

チョー・オユーから七年

チョー・オユーの時は頂上で四十分くらい酸素を外して行動しても平気だったのに、あれからもう七年が過ぎていた。初めてのヒマラヤでわからないことがばかり、戸惑うことも多い山だったが、同じ年齢層の仲間というのは、体力的には大差ないのでその点は気が楽だった。

チョー・オユー登頂後の下山ではシエルパに続いてC2まで駆け下りた。私が続いて駆け下りはじめたのに気づいたシエルパ(ミンマ・ノルブ)は立ち止まり、スリッパしたらいけないと、下で構えて待っていた。しかし、私の足取りを見て大丈夫と思ったか、その後は時々振り返るだけで下っていく。そのシエルパもエベレストで雪崩に遭い、今はもういない。

あの時は雪の状態もよかったから、駆け下りたが、今ならどうだろう。雪の状態がよくても、もうその脚力はないかもしれない。チョー・オユーの時は五十二歳と十カ月、五十

歳を過ぎてからの、七年の歳月というのは、自覚以上の体力減退があるような気がする。

ダウラギリに登った時が五十五歳と十月、あの山も下から見た時は果たして登れるのだろうか、と思っただけだ。存在感のある雄姿、美しいあの山頂にぜひ立ってみたいと願った。憧れの小西政継さんが一緒だったこともとても励みになった山だった。興味深いお話をうかがいながらの登山はとても楽しかった。GⅡと一緒にこれなかったことが残念でならない。ダウラギリも巧い登頂タイミングとシェルパたちの協力で山頂に立てた。

■平均年齢は五十八歳

今回のGⅡは隊員十六名。今までのメンバーに新たな九名が加わり、さらにNHKの撮影隊員が加わって二十一名となった。ミーティングも食事もたいへんな賑やかさ。食堂テントはいっぱいで、話も端から端まで行き渡らないような状態だった。隊員の平均年齢は五十八歳を超え、六十歳以上七名を含む登山隊というのは、よその隊からはどう見えたのだろうか。

それぞれの人が精一杯自分の持っている力を出して頑張った。ひたすら上へ上へと気持ちを引き上げた。皆で

やったトレッキングといえば、暮れから正月にかけての明神東稜と、五月連休の富士山行くらしい、後はすべて自己トレーニングだった。

私の場合は明らかにトレーニング不足。一月から三月というのは職場の繁忙期、気持ちが焦るだけで実行が伴わない状態。その上三月に入ってから食糧計画もまともに入って、ますますゆとりはない。退職してゆとりの出るはずの四月に入ってから食糧のパッキングなどに追われて倉庫に日参。

せめて富士山にもう一度と、パキスタンに先発する直前、富士急行線最終電車に乗った。富士吉田駅で下車、一人深夜の吉田の街を浅間神社目指して歩く。

大石茶屋を過ぎ、馬返しを過ぎるころからもう眠くて眠くて、どうにも我慢がでずに倒木の上に横になる。しばらくとうとうとしたが寒くて目が覚めた。霧のような細かい雨が音もなく体を濡らしていた。富士吉田の駅から歩くのはダウラギリ遠征以来のことである。あの時に比べてこれだけ眠いのは、やはり疲れが溜まっているのかなと思いつつ、風邪を引かないよう、体を起こしてまた歩きはじめた。

富士登山競争で富士吉田から三時間をきる速さで山頂まで駆け上がる

人がいるなんて、信じられない。結局私の体調は現地に入ってキャラバンで整えるしかない。そんな出発前の状態だった。

今回私がGⅡに登頂できたのは、一次隊に選んでいただいたお陰、そしてアタック時の天候にも恵まれたからと感謝している。幸運だったと思う。五十代での八千メートル峰三山登頂なんて、思いもかけないこと。よい時に、よい仲間に出会えて、素晴らしい山行ができたことに心から感謝したい。

そして私もついに六十代となった。今までのようなトレーニングもしない怠け者では山には通用しない年齢になってしまった。山を楽しみたいのなら、まずトレーニング、わかっているけれど、この実行がなかなか難しい。

いつまで山歩きができるか、それも私の心がけ次第というわけだ。

*

ガッシュブルムⅡ峰登山隊隊員

隊長・池田錦重(59)、ドクター・堀井昌子(61)、隊員・深瀬一男(63)、平田恒雄(63)、高橋巖(62)、片柳実(61)、石川富康(61)、遠藤京子(60)、渡邊玉枝(59)、田部井淳子(58)、森山勇(58)、根津皖一(58)、大山昇(57)、浅野弘幸(54)、北原修(48)、後藤真理(47)

山研のミニ水力発電計画 実行委員会発足

実行委員長 小倉茂輝

一九九八年十二月理事会において山研「ミニ水力発電計画」実行委員会が承認された。神奈川工科大学との共同研究である。

一九九三年四月に竣工した山研改築の時点で、クリーンエネルギーを利用して「ミニ水力発電」が計画されていたが、残念ながら資金もなく、行政に許可について相談したが、色よい返事はもらえなかった。『山岳』八八年「新上高地山岳研究所の建設」

その後クリーンエネルギーの利用については国際的にも理解が進み、一九九七年の「CO₂削減・京都会議」が開催されるにおよび、クリーンエネルギー利用について社会、行政の見方が変わってきた。

資金も電気事業連合会が、山岳会の計画に賛同してくださり、東京電力、中部電力、日本原子力発電の三社から五百万円の募金をいただいた。三月初め、文化庁、環境庁に申請書類を提出し、四月末には認可される予定である。「山」六四七号で計画の詳細を述べる。

報告

REPORT
3月

図書委員会

第二十七回山岳史懇談会
小島烏水・岡野金次郎のこと

平成十年は、小島烏水没後五十年（昭和二十三年十二月十三日没）、岡野金次郎没後四十年（昭和三十三年二月十四日没）という節目の年に当たるので、岡野金次郎の孫・岡野修氏に「祖父岡野金次郎のこと」、大修館書店編集者・小川益男氏に「小島烏水全集と覆刻版編集こぼれ話」と題し話していただいた。十一月二十六日、ルームに三十名が参集。要旨は次のとおりである。

岡野修氏の話

岡野金次郎は、徴兵検査の会場で、ともに不合格ということで烏水と知り合い、一緒に山に登るようになったことはよく知られているが、岡野の不合格の原因は、身長が不足して

いたためであった。金次郎の人柄は進取の気性に富み、よく怒る雷おやじであったが、怒った後はさっぱりとしていた。初めは医者になりたかったよう、船医の助手としてヨーロッパに行っているが、結局のところ

日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です。



烏水、金次郎の活躍を聞く ルームにて

ろ定年まで、横浜のスタンダード石油に勤めた。英語は独学でマスターしたようである。

とにかく歩くことが好きで、晩年は、朝起きると歩き、昼食前に歩き、夕食前にまた歩き、寝る前にも歩くといった調子で、一日四回歩いていた。地下足袋に金剛杖を持ちリュックサックを背負って、一回に十五分くらい歩いていた。しかし不幸にもこの散歩中にオート三輪にはねられて頭を打ち、半日後に亡くなった。

烏水とは晩年は仲良くなったが、一時付き合いが途絶えた時期があった。烏水の貴族趣味というか派手な言動が、金次郎とは肌が合わなかったのであろうと思う。また金次郎は克明に日記をつけていたが、関東大震災で焼失してしまった。その後も日記を書く習慣は続いていたが、登山に関してはあまり書き残していなかった。

小川益男氏の話

小島烏水の生年については、本人は明治六年十二月と言っていたが、戸籍上は明治七年になっている。この一年のずれは、この時期はまだ旧暦と新暦の混乱期であったためと、烏水が長男として生まれたため、しっかりと育つことを確認した上で戸籍に入れたということが考えられる。烏水は五男二女の長男だが、烏水自

身も三男三女の子福者であった。

烏水が『文庫』の記者をしていたとき、盛岡から上京してきた石川啄木が烏水を訪問している。啄木の日記に「明治四十一年四月二十七日午後六時横浜に着く。翌日烏水に会った。昼食を洋食屋で一緒にとる。話すことがとても上手。二時の汽車で東京に向かったが、桜木町のホームまで送ってくれた」と烏水の人物像の一片を伝えている。

烏水がアメリカから帰国した際、持ち帰ったエッチングのコレクションに、横浜税関で十割の関税が掛けられることになったため、このコレクションはアメリカに送り返された、という話が伝わっているが、実際はある人の口利きで無事上陸し、烏水の手元に収まった。一九九五年三月に横浜美術館で小島烏水コレクション展覧会が開かれたが、百八十点が展覧されている。

七十周年のとき覆刻した烏水の『日本アルプス』全四巻は、現在ではとても造ることはできないだろう。手造りで本を作る職人が今はいないからである。また『氷河と万年雪』の巻末広告に出ている『日本アルプス探検時代』は、出版社を替えて『アルピニストの手記』と題して出版されたものではないかと考えている。烏水の文章は教科書にも取り上げら

れている。明治四十年の明治女学読本『不二山』の中に「雪の不二」が入っているが、これが最初のものであろう、と話を結ばれた。(林栄二)

データバンク研究会

山の本探しもホームページで

山岳会のホームページ(以下HP)も一歳になり、年次晩餐会を機会にリニューアルしました。登山者(H P訪問者)もあつという間に一万人を超えました。これまでに、会報ではHPの紹介や自宅から見る方法、ルームのパソコン利用法、山に関するHPの紹介などを行なってきましたが、今回は本に関するHPを紹介してみたいと思います。

■出版関連のホームページ

毎週千数百冊の新刊書が発行され、取次店を介して書店に並べられます。当然ながら店舗の面積により、並べることのできる本は限られますが、インターネット上の仮想書店なら制限はありません。紀伊国屋書店、丸善など書店のHPでは数十万冊の在庫を検索できます。毎週の新刊図書と過去十年あまりの書籍に関する情報は、図書館流通センター①で入手できます。また、日本書籍出版協会②のHPでは、毎年発行されている日本図書総目録掲載五十万冊余りの

書籍を検索できます。ここには会員になっている五百社以上の出版社のアドレスもあるので、直接出版社を探索ときも便利です。このように膨大なデータをアクセスすることもネットワークの醍醐味の一つですが、一方ではなかなか手に入らない地方や小出版に山や自然に関する良書が多くあります。

(株) 地方・小出版流通センター③では、これら新刊書に関する情報が毎月更新されています。

■古書関連のホームページ

数年前の古書市で試験的に運営された神田古書店HP④を含め、現在では全国に多くの古書関連HP⑤が開設されています。神田の古書店街では、それぞれの書店に得意の分野があるように、HPにも店の特徴が出ています。顧客の希望図書を市場で探してくれるように、自分で加盟店の在庫から調べることもできます。残念ながら日本では古典的な名著はほとんど見つかることはできません。

■山岳書関連のホームページ

インターネットに国境はないので、海外の書店も自由に利用できます。Cheslerbooks⑥はコロラドにある山岳専門書店で、山岳・探検関連書籍の蔵書では全米一です。しかし、山岳書専門の書店は少ないので、例えば米国のAmazon⑦など世界最

大級の書店HPを利用して検索するのも一つの方法です。この場合は、多くの検索に共通しますが登山以外に、アウトドア、スポーツ、旅行、自然など関連する項目を丹念に探すことも必要です。また、個人で本に関するHPをよくまとめている中野義夫さんのHP⑧など、個人のHPからたどって行くのも楽しみです。

(狩野芳郎)

- ① <http://www.trc.co.jp/trc-japan/>
- ② <http://www.jbpa.or.jp/>
- ③ <http://www.bekkoame.ne.jp/~much/access/actop.html>
- ④ <http://www.book-kanda.or.jp/>
- ⑤ <http://www.kosho.or.jp/>
- ⑥ <http://www.cheslerbooks.com/>
- ⑦ <http://www.amazon.com/exec/obidos/subst/japanese/books/books.html>
- ⑧ <http://www3.justnet.ne.jp/~yoshio-nakano/>

丹水会・第三十五回例会

三国山・湯船山へ

第三十五回丹水会例会は四十八名が参加し、富士山の東に連なる三国山・湯船山の山行、講演会、交流会を行いました。

十一月二十二日、JR御殿場線谷

峨駅に集合、車に分乗して明神峠へ向かいました。

明神峠から三国山と湯船山へは登山道が左右に分かれます。半年ぶりに会う仲間と語らいながら三国山を目指しました。あいにくの曇り空のもと、咲き残ったトリカブトやリンドウが、葉を落とした林の中でわずかに色を添えていました。

丹水会では初めての試みとして、三国山の頂上で豚汁を作るために若手が先行したところ、意外に早く本隊が到着して大慌てでした。気温がぐっと下がって小雪がちらつきはじめた山頂でのささやかな豚汁は、たっぷりの薬味がきいて体を温めてく

チベット高原上空からヒマラヤを越えカトマンズへ
(名古屋発着・中国経由便)

ヒマラヤ
越えフライト
〈第5回〉

5/1(土)から5/9(日)まで

ヒマラヤ越えが魅力の特別運行便
ボーイング757、機窓からの大パノラマ



運輸大臣登録一般旅行業490号/日本旅行業協会正会員
アルパイン・サービス株式会社

〒105-0003 港区西新橋1-12-1(西新橋1森ビル) TEL.03-3503-1911
大阪 ☎06(6444)3033 名古屋 ☎052(581)3211 福岡 ☎092(715)1557

れました。あっという間に大鍋が空になり、後続隊のためにとっておいした小鍋にみんなの視線が注がれる一幕もありました。

写真撮影後、明神峠を通り越し、湯船山に向かいました。落ち葉を敷きつめた緩やかな登りを繰り返し、冬枯れの静かな山頂に到着。見通しはよいものの、今にも泣き出しそうな空だったのは残念でした。山座同定も諦めて、小雪がちらつく中を明神峠に戻りました。

足柄の宿へは明るいうちに到着。山行しなかった会員も加わり、後半の部がはじまりました。

講演会は、恒例の丹沢回顧談はお休みして、この夏にガッシャブルムⅡに登頂した渡邊玉枝さんがスライドを交え登山の模様を講演。渡邊さんの写真はいつもながら素晴らしく、人柄のにじみ出た話術に引き込まれてしまいました。

続いて登山隊医師として参加した堀井昌子ドクターの話も、思い当たる節のある私たちには大変参考になる内容でした。

代表幹事である大森ドクターの挨拶、亡き会員への黙禱、初参加の会員の挨拶のあと、片岡さんの乾杯の音頭で夕食がはじまりました。食堂での夕食はほどほどに切り上げ、和室で車座になつての交流会が続きます。

した。丹水会には欠かせない大森ドクターゆかりの「飛騨娘」をはじめ、会員が持ち寄ったアルコール飲料が媒介となり、夜更けまで歓談が続きました。が、話題の中心は何といつても渡邊さんのガッシャブルムⅡでした。

翌二十三日は宿の前で記念写真を撮り、「来春、また逢いましよう」と渋滞に巻き込まれないよう早目に解散。すぐに帰宅する者、もう一つどこかに登るグループと、いくつかに分かれて帰途につきました。

(國見ゆみ子)

三水会・第三八七回現地集會

新年山行・雨降山

新年恒例の三水会・EWC共催山行は、坂倉登喜子、川崎精雄、お二人の名譽会員の参加を得て、雨降山山行となった。

一月九日朝、西武池袋駅に集合して八時五十七分発の電車に乗り、終点の西武秩父駅着十時四十三分。タクシーで吉田町の秩父困民党が集結したことで有名な棕神社に初詣に行き、龍勢(ロケット)会館を見学してから龍勢茶屋で昼食にした。再びタクシーで城峰神社へ上り、城峰山一〇三八メートルを往復(意外に展



雨降山の頂上で記念撮影

望のいい山で、神流湖が見えた)した。神主代理の観光協会会長のお話をうかがってから万場町に向かい、今井屋旅館に投宿する。

夕食時、各自、今年の抱負を語り、食事を堪能して早めに就寝した。

翌十日、八時少し前に宿の車で出発。鬼石町に向かい、神坂トンネルの手前で右折、スーパー林道との合流点に八時三十分に着いた。バスを降りて、雨降山の登山口まで林道を十五分ほど歩く。標識に導かれ、赤鳥居をくぐって登山道に入ると、杉の植林帯になる。一度、尾根に出て樹林が切れて明るくなるが、再び植林帯の登りとなる。人声が聞こえ、

琴平大明神の幟が見えてくると、尾根に出て小さな神社がある。右横に奥の院(三波川の上流にある琴平神社の奥宮、山開きが五月二日に行われる)があり、数名の人が祝詞をあげていた。ここを左に行き、テレビ塔を過ぎると、二、三の起伏を経て雨降山の直下に出る。十時三十分であった。ここからが急坂で、土が乾いて砂をまぶしたような道となり、登るのに苦労した。山頂着十時三十八分。この山は三等三角点であるが、樹林に囲まれ展望はよくない。

南の下山道に入ると日当たりがよく、神流湖から城峰山も見えた。十一時に下山開始。鞍部で休息して往路を戻る。北風が強くなり、尾根道歩行は寒い。神社には講中の方は下山したようで見えなかった。杉の植林の中を下って、登山口着十二時二十五分。スーパー林道に行き、呼んだタクシーを待って、十三時に今井屋に預けた荷物を受け取り、土坂峠を越えて西武秩父駅前に十四時三十分に着、食堂で昼食をとって解散した。

参加者は三水会十四名、EWC三名。タクシーを待つ間、Sさんの音頭で「また逢う日まで」を輪になって合唱したが、あの方はロマンチストで、いつまでも若い人だと感心した。

(石田稔郎)

海外の山

サムライ・クライマーの死

江本嘉伸

「Masters of Stones 4」というビデオがある。クライミングの最先端を紹介するものだが、軽い気持ちで見ると、キモをつぶす。

ドライスーツ姿のクライマーが、冷たい水しぶきを浴びながら、ダブルアックスで冬の滝を攀じる。猿のようなスピードで、垂直の、あるいはハングした壁を登攀する。終了点まで達すると、身をザイル一本に託して、空中にそのままジャンプ：。

何人かのクライマーが登場するが、目立つのは、断然ダン・オズマンだ。三十五歳、ヨセミテでは有名なクライマーである。

近着のアメリカのクライミング雑誌「Climbing」や「Rock and Ice」は、そのダン・オズマンの栄光と挫折について特集している。

な花崗岩の壁、リーニング・タワーを攀じたあと、一〇〇〇フィート(三三〇メートル)もの高さからジャンプし、生きて帰れなかったのだ。ザイルが切れたためとみられる。

東洋人の風貌と鍛え上げた鋼のような身体を備えたオズマンは、この十年、千回にも及ぶ「フリー・フォール」を試みて成功している。一〇ミリ・ザイル一本をハーネスにつなぎ、断崖のへりの三、四メートル手前から「五、四、三……」と数えて一気に空中に飛び出すのだ。落下のスピードは、時速一六〇キロにもなる。六〇メートルのザイルを何本もつなぎあわせただけの命綱。ザイルが伸び切った瞬間のすごい衝撃をどのように胸もとのハーネスで受け止めるのか、その「ゴツ」はオズマンしかわからない。

オズマンは、常に「より速く、より高く」を求めた。落下高度を、一〇〇メートルから二〇〇、三〇〇と上げていったのも、最高記録への飽くことない挑戦の結果だ。

なぜ、それほどまでして危険なことをするのか？ 人々の称賛がなくなくなるのを心配しているのか？、と聞かれて、オズマンは答えた。

「こういう挑戦から逃げたら自分自身を尊敬できなくなるからさ」

日系人の父親は、サムライの血が流れている証拠、と喜んでいる、とも語った。父は恐怖と向き合うことの大切さを、子どものオズマンに言い聞かせてきた、という。

常に危険とすれすれのところで生きるオズマンのやり方を批判する者もいるが、友人たちは彼の慎重さ、危険を回避するためにあらゆる努力をしてきたことを称賛する。

ヨセミテの代表的な岩場、エル・キャピタンでのスピード・アッセント競争は、年々過激になっていった。

オズマンは、その中からスピードに加え、他の困難をいくつもかかえこんでその克服に情熱を燃やしたのだ。九二年のレイク・タホのケイブ・ロックでは、Slayer(五・一四a)を登るのに、墜落骨折した足首の治療のための五カ月を含め十三カ月もの試登を重ねている。

命の危険までは侵さずに、富と名声が得られるとしたら満足できると思うか？ と聞かれてオズマンは「そうは思わないだろう」と答えている。危険に身をさらすことがオズマンにとっては、人生を精一杯生きることなのだ。

ローラー・ボードを履いて、またはマウンテンバイクに乗ったまま断崖から落ちるオズマン。ビデオはス

ローでそうした「危険の瞬間」を繰り返し見せる。そうだ。これは確かに命がけのパフォーマンスなのだ。ぎりぎりの危険と向き合ったときの人間の恐怖心、それを克服しようとする勇氣について、オズマンは何かを証明しようとしたのだろう。その心意気には打たれるが、それをサムライ精神と結びつけるのは、「ハラキリ」を連想させて無理があるように思う。むしろ「ビデオ時代」の究極の表現手段の犠牲者という感がある。

悲劇に終わったオズマンの挑戦について、いまや世界のトップクライマーとなった平山ユージは「勇氣はすごいが、技術でカバーできない挑戦は、自分ならやらない」と話していた。

オズマンには短い結婚で生まれた十二歳の娘がいる。彼の勇氣ある死に敬意を表して仲間たちは彼女の名を冠した「Emma Osman 基金」をつくり、協力者を募っている。



「Climbing」誌3月15日号の表紙を飾ったオズマン



京都支部

「京の北山」の奥の院 あしう 芦生の森

当欄についてご意見、ご感想、またおもしろいアイデアなどがありましたら、お寄せください。
総務部

「芦生の森」は、地球温暖化が心配され、すべてがコンクリートジャングルに覆われるかと思われる今日の日本にあって、今なお手つかずの原生林を含む五千ヘクタールを超える広がりを持つ山林で、日本の風土の真の姿をよく伝えている貴重な森である。しかも京都の都心から直線で北へ、わずか五〇キロしか離れておらず、古くから京都の後背地として、深い関わりがある。また京都学派とよばれる数々の傑物を育んだ「京の北山」の奥の院でもある。

三国岳（九五九メートル）は京都府下第三位の高峰で、山城、丹波、近江の三国の国境であり、これより少し北の三国峠は、近江、若狭、丹波の国境を意味する。

現在は京都大学の演習林となっており、太平洋側と日本海側、温暖帯と冷温帯との交差点ともいえるべき移行帯にあり、動植物とりわけ植物の宝庫といわれるところである。

1	コースタイム	・三国岳：岩屋谷・滝谷出合—2時間—山頂—1時間30分—岩屋谷・滝谷出合 ・天狗峠：同上—2時間30分—山頂—同上 ・ブナの木峠：地藏峠—2時間30分—ブナの木峠—1時間30分—傘峠—2時間30分—地藏峠
2	記 録	
3	地 図	国土地理院（25,000/1地形図）久坂 中 古屋 久多 エリアマップ京都北山（Ⅱ） 昭文社
4	交 通	・R 162号—美山町安掛—芦生須後 京都市内より2～2時間30分 JRバス—美山町営バス JRバス京都駅案内所 Tel・075-341-0489 ・京都バス 広河原行き終点下車—徒歩佐々黒峠—灰屋—須後 京都バス高野営業所 Tel・075-791-2181 ・滋賀県から朽木村生杉から地藏峠経由 交通の便悪し
5	付近の観光地	・美山町 かやぶき集落（伝統的建築物保存地区） ・京都市
6	そ の 他	府立青少年山の家 Tel・0771-77-0290 芦生なめこ生産組合 Tel・0771-77-0236 美山町観光協会 Tel・0771-75-0310
7	参 考 図 書	『関西の秘境 芦生の森から』（株式会社・かもがわ出版） 北山クラブ編『北山白山』（ナカニシヤ出版） 内田嘉弘著『京都丹波の山』下（ナカニシヤ出版）
8	問い合わせ先	秋野子弦（会員番号8720） 高松武夫（会員番号11221）

東九州支部

九重山群で登られない山

硫黄山

大分県の中西部にあるこの山群は、一七〇〇メートルの峰々を林立させることから「九州の屋根」といわれ、やわらかな草屋根の高まりと周囲の広大な草原を従えている。そのなかに遠くからでも白煙が見えるこの山が、硫黄山（一五八〇メートル）である。

一九九五年十月十一・十二日朝にかけて噴火したらしい。実に二百七十六年ぶりである。三年過ぎたいまでも、各地より登山者が多い。日本百名山であり、一等三角点（本点）の久住山一七八七メートル、三俣山一七四五メートル、中岳一七九一メートルからの眺めは、格別である。

山腹には、法華院温泉があり、福岡支部長・松本征夫、東九州支部長・梅木秀徳作詞「坊がづる讃歌」の地である。「人みな花に酔う時も、残雪恋し山に入り」、二泊して九重の心地よい山群を味わいに訪れてほしい！

1	コースタイム	・牧の戸峠—1時間30分—久住わかれ—30分—久住山 ・赤川—2時間—久住山 ・長者原—1時間30分—すがもり越—20分—西峰—20分—主峰
2	記 録	
3	地 図	国土地理院 (25,000/1地形図) 久住 久住山 大船山 湯坪
4	交 通	J R久大線豊後中村駅—バス—長者原—牧の戸峠 ・日田バス飯田高原営業所 Tel・09737-9-2354 ・大分バス大分営業所 Tel・0975-36-5625
5	付近の観光地	・法華院温泉山荘 Tel・0974-77-2810 ・国民宿舎コスモス荘 Tel・09737-9-2221 ・黒岳荘 Tel・0975-85-1161 ・白泉荘 Tel・0975-85-1168 ・八丁原ビューホテル Tel・09737-9-2234
6	そ の 他	照会・久住町役場 Tel・0974-76-1111 ・九重町役場 Tel・0973-6-2111 ・東九州事務局 Tel・0975-32-0926
7	参 考 図 書	『登山ガイド 大分百名山』日本山岳会東九州支部 『日本百名山登山ガイド 下』山と溪谷社 『九州百名山』山と溪谷社
8	問い合わせ先	西孝子（会員番号8325）



コンパスグラス HB-3

広視野10°の明るい視野に目盛が重なって見えます。見た目標がそのまま正しい磁気方位です。

重量78g.
つや消し黒 ￥17,000 送料 ￥600
黄緑色メタリック ￥18,000 消費税別
カタログ代無料、電話、FAX、郵書でどうぞ
〒177 東京都練馬区上石神井1丁目37番13号
TEL 03-3926-5411 FAX 03-3926-5411

株式会社 石神井計器製作所

ネパール国際山岳博物館募金応募状況

表記の募金にご協力くださった方々のご芳名を掲載し、お礼に替えさせていただきます。(12月末日現在)(敬称略)

5名 9口 52,000円 累計935名 2,672口
13,386,517円

- 2口 (10,000円) : 神戸常雄 本片山数雄 黒田守彦
- 1口 (5,000円) : 高島法男
- その他 (17,000円) : (株)朝日旅行会

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、一点につき二〇〇字詰原稿用紙五〜六枚でお願いします)



イラスト 野田四郎

W・ボナッティ氏の礼状

親愛なる斎藤惇生博士

日本を後にし、帰国してのち、連続して国外へ赴かなければならない用に見まわれました。そのため遅ればせながら、今日になってようやく筆をとっています。

まず、私どもの日本滞在中、皆さんが絶えず示してくださったご友情、ご親切な歓迎、そしてご厚情に、心から感謝していることを、日本山岳会の会長としてのあなたに伝えさせていただきます。妻ロッサナと私にとって、滞在中お会いした皆さん、そしてそこで見ることできた日本の素晴らしい風景は、とてもとても美しい思い出となりました。そしてそれらは、常に心温まる思い出として想起されることでしょう。

これからも再びお会いできることを期待しつつ、私どもの心からの親愛の情が伝わりますことを願っております。

一九九九年一月十三日

ワルテル・ボナッティ

同名異本に思う

夢尾泰典

「エヴェレストへの長い道」の出版広告が新聞に載ったとき、シブトンのが再版されたのかと思った。が、作者を見ると違う。こんな馬鹿なと出版社を見ると山と溪谷社、わが目を疑った。そんなおり、「山」誌上で「樹林の山旅」という同名異本の出版に対する山本健一郎氏の怒りの投稿を見て、訳本だけでなく原著でもこんなことが起きているのかと呆

れ果ててしまった。

浅野孝一氏の「中は読まずにどうして論ずる」という反論で、ティム・マッカトニー・スネイプ著、海津正彦訳「エヴェレストへの長い道」を読み出した。山登りの企画といい、本の内容、訳、すべて申し分ない。海津正彦氏は訳書も結構あり、山もよく登っていらっしやる方で、しかも出版社は山と溪谷社、それなのにどうしてシブトン著、深田久弥訳と同名——オリジナリティを減ずる——にしたか、ますます信じられない思いがした。「山」誌上での図書紹介欄でもこのことには触れられていない。

浅野孝一氏の「樹林の山旅」にも目を通してみた。上梓するには大変だったろうと推察される。が、そのあとがきおよび「山」誌上での反論は居直りとしか受け取れなかったのは私だけではないだろう。同名のがあれば、出版が遅れても別の題名を必死に考えるのが先人に敬意を表するということではないだろうか(友曰く、こんなことぐらいにいちいち目くらを立てなくても、他の友曰く初登攀ルートを以前登られたルートと同じ名前にする人はいないだろう)。

山と溪谷社、実業之日本社という山の老舗の出版社から、同名の訳書、

著書を立派な経歴の方が著すという信じられない行為に驚きを禁じ得ない。せつかくの労作の価値を自ら著しく貶めているだけではないだろうか。

当会には山の本に一言を持つ方がたくさんいらっしやるのに、この問題に関する論争が少ないのが残念である。

オボコンベン山に登った!!

李 宅淳

まず私がオボコンベン山に登った光栄の至りに対して、日本山岳会宮城支部の柴崎徹支部長をはじめとする会員の皆さまに深く感謝いたします。私は平成十年一月に東北大学の客員研究員として来日しました。日本山岳会宮城支部が四十周年記念の一環として、韓国の太白山、小白山に登山する計画に参加し、また私を含んだ十三人が韓国の太白山、小白山と一緒に登ったことをきっかけに、私は日本山岳会宮城支部の会員になりました。

私が日本に来て登った山は、宮城県の水引入道、船形山、泉ヶ岳、太白山、そして福島県の半田山、日山、小野岳です。その中で最も印象に残っているのは、私の日本山岳会への

入会記念イベントとして、三宅会員が企画したオボコンベン山登山です。山行には最高的人数だった二十八人が参加し、秋の落葉から出る音を聞きながら歩いて約一時間、オボコンベン山が突然目の前にそそり立ちました。頂上までの約三〇メートルは八〇度くらいの急傾斜で、若干の危険性があったので、ある程度のスリルを味わうことができました。

平成九年度宮城支部の「とっておきの山」でもあるオボコンベン山は、約五八五メートルでそれほど高くはありませんが、ずいぶん面白い形態の山でした。オボコンベンという山の名は面白い三つの説に由来すると言われています。また、山の頂上にはマンモス岩があって、オボコンベは小さい山でありながら、大変素晴らしい印象を受けました。

下山してから山裾の川原で食べた韓国風のキムチ鍋(三宅会員が準備してくれた)は、一生忘れられぬ味であり、賑やかな雰囲気とお酒を満喫しました。また私が登ったオボコンベン山では、日本の素晴らしい晩秋の風景を味わうことができ、一番うれしく思っております。

最後に、一年間の日本での生活に、活力およびよい思い出を与えてくださった日本山岳会宮城支部の柴崎支部長をはじめ、会員の皆さまに深く

感謝いたします。これからも山を通じた友情と日韓親善のためにいっそう努力する所存ですので、よろしく願っています。

パキスタン、フンザの旅

上野幸人

フンザの旅は私の憧れであった。四、五年前にテレビで紹介された時、その風景とそこに住む人々がとても印象的であり、いつの日か訪れてみたい場所となっていた。

荒涼とした山あいのなかに広がるオアシスの町は桃源郷のようであり、私が思っていた通りの所であった。それまでの地域と違い人々の姿が穏やかに見える。声を掛けてくる子供



薪を集める子どもたち

たちも、姿を見せる女性たちも、同じ国の人々とは思えないほどやわらかな表情をしていた。

この地の出身者であるMr. ベイグから聞いたところ、富めるものはより多くのお金を差し出し、病めるものの、貧しきものはできる範囲で差し出し、アーガン基金として蓄え、そのお金を学校や病院などを建設する全体の福祉として利用している、とのことであった。そのためこの地では税金を徴収していないとのことである。まるで宮沢賢治の言っているイーハトーブのようでもある。

フンザワインを囲んで

異国の地での旅のせいか飲めば飲むほど饒舌になる

僅か一週間ほどの旅なのに心がふれあい沢山のことを語り合った

ただ一人の人とさえ心をうちとけ合うには長い時を必要とするのに

僅かな時のなかで多くの人達と心が通じ合うことができた

楽しいひとときであった

フンザの国の夜のひとときである

旅は心を豊かにしてくれる

旅はそれだけで色々なことを語ってくれる

フンザの旅はそれをよく物語っていた

憧れのマッターホルンに登る

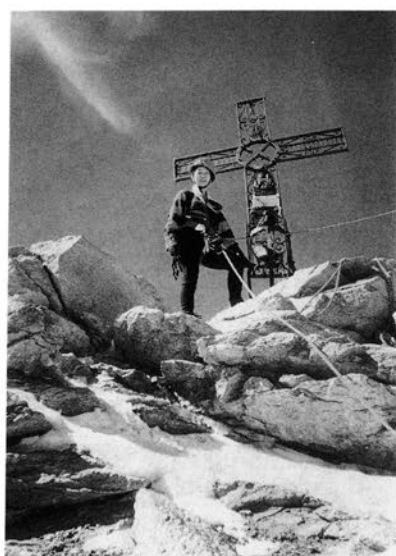
植木淑美

八月二日、フランス・シャモニー到着。コスミック岩稜で高度順応ののち、四日、モンブラン(四八〇七メートル)に登る。寝不足と高度障害で、手の痺れと頭痛少々。この山行の疲労は三日間取れなかった。

十二日、ブライトホルンに登る。モンブラン効果ありで体調良好。

八月十四日、四時三十分、ヘルンリ小屋(三二六〇メートル)発。ヘッドランプの灯りだけで、脆い岩場を登るのは大変なことだ。一度ルート修正の後は、順調にぐんぐん登る。小気味よく登る。何かが私に取りついたのか? 夜明けとともに目にする景色の変化が楽しい。鉄杭の支点のある急登のあと、ひょっこりとソルベイ小屋に七時三十分着。ベンチもあって、私たち六人だけのティータイム。なんの音もしない、静寂そのもの。このまま天国へ続く道なのかしら、そう、頂上にはマリア像の十字架が立っている。

雪が出てきた。太くて握りにくいフィックスロープを一ピッチ登ると凍ってきた。二ピッチ登った急斜面でアイゼンをつける。あまりの急斜面にI氏、アイゼンと格闘。もう下



憧れのマッターホルン頂上で

本当にのんびりと写真を撮ったり、それがそれぞれの思いに浸る。U氏の衣服が細くたなびく。風もなく、日差しも程々で最高。こんなに恵まれてよいのでしょうか。

「さあ下りは慎重に」と自分に言い聞かせ

ってくるパーティーとすれ違う。皆ガイドにお尻を叩かれてフーフィーって下って行く。ちっとも楽しそうな人がいないのはなぜだろう。現地のガイドがどの人も冷酷非情な調教師に見える。ムチなど持っていないのに、人の命を預かる仕事の厳しさの現われかもしれないと思う。この山は、一瞬の気のゆるみも許さない。まともに立つことのできない斜面の連続で、一日に一二〇〇メートル登り、一九〇〇メートル下る。これほどハードであっても人を魅了する何かがある山、マッターホルン。アーよかった。たった一人明るい顔に出会えた。日本人男性がすれ違いざま「てっぺんにお地藏さまが待っているヨ」。

十時三十分、十字架のマリア様と対面。山頂は六人の貸切状態。思う存分展望を楽しむ。一時間の休憩は、

ながら、丁寧に手を下げていく。また錯覚におそわれる。いつもの見なれた顔と前穂北尾根にでもきているような、いや今日は本番だった。雪壁が終わって肩からフィックスロープをワンピッチ下ったところで、U氏がザイルの束をザックに入れようとした。ご自慢のカメラを平らと思われる岩に置いたと同時に、カメラは超特急で飛んだ。一度バウンドして、一秒後には米粒大だった。秘蔵のカメラはマッターホルンの露と消えた。カメラでよかった、Uさんでなくて。

やっと自分のいる場所がどんなところか気がついた。私はすごく怖いところにいるのだ。それからも教えられたとおり、真っ直ぐ下を向いて下る。フォールラインに体を投げ出すように、腰が引けないように、山にしっかりと対面する。な

ぜか怖くない。いつも通り、トレーニングと同じ気持ち。ソルベイの小屋までが長く感じられた。十四時三十分着。

ソルベイ小屋の下、ワンピッチ下ったところで急な斜面を懸垂で下る。U氏、私、Iさんの三名で先行するが、小屋から一時間ほど下ったところからルートファンディングが難しい。一瞬立ち止まる。これであろうと思えるルートをとうとうすると、リーダーから激しい声が飛ぶ。「左だ、もっと左」。ルート修正して進むうち「なるほどそうか」と納得する。最もよさそうに見えるルートは、その後難しくなってきたそうだった。「下りきってここを登ったことになる」。

最後まで気を抜くな！張りつめよう。しかし長い。もうヘルンリに手が届きそうに思えるところで、U氏の楫が飛ぶ。「もっとしっかり先までよく見て、頭使って、足下ろしてえ」「だって足の長さがあ」。私も疲れてきたようだ。朝、ヘルンリ小屋を出発してから十二時間がたとうとしていた。十七時三十分、ヘルンリ小屋着。休憩後シュヴァルツゼーに下る。

今、振り返って思う。現地ガイドと一対一でザイルにつながれて登ったほうが安全だったかもしれない。しかしそうしなくてよかった。東京

でのトレーニングで得た仲間と登れたこと。前日までのツェルマットの岩場でのコミュニケーション、励まし合い。自炊をしながらの毎日の語り。同じ目標に向かって気持ちが一つになったこと。「チームワーク」は日常生活のなかで生まれ、もうその時登攀ははじまっていたのかもしれない。

この山行で宝物をいただいた。「登頂の成功」ではなくて「その過程」という宝物。「一番苦しんだウエキさんが一番よい山やったヨ」と言ってくださった仲間のいたわり。この山は私に人のぬくもりを教えてくださいました。マッターホルンは温かい。

山日記

早乙女緩次

『山日記』、それは私にとっては長いこと座右の書であり、山の知識の源泉でもあった。残念なことに昭和六十三年版発行を最後に廃刊となってしまったのである。これを愛用し続けて山行をともにした人たちも多かったことだろう。初版が昭和五十年の終焉とともに消え去ってしまったのである。私の聞きなれた言葉に「十年一昔」というのがあるから、

もはや昭和も遠くなりけりである。ノンビリしていた昔に比べ情報が錯綜化し、紆余曲折がより多くなった世の中にあつては、この言葉を使わせてもらってもいいだろうと思う。

激動の時代を生き抜いてきたこの『山日記』は、戦争と敗戦という試練を体験させられてきたため、発禁と紙不足に見舞われたのだろう。したがってこの期間の四年間は休刊せざるを得なかったらしい。昭和二十四年(一五輯)版の(まえがき)によれば、その前年にこれまでの最高購読者に恵まれたとあったから、この頃の山ブーム到来ならば当然のことであり、長く尾を引いたであろうとも思う。

私も大きなキスリングのタッシュまたはサブザックに非常食やら懐中電池と一緒に入っては山に出かけた。『山日記』それはあくまでも、通常の日記帳の類を網羅しながらも山行のアンチヨコとでもいおうか？ 小辞典的に重宝で、大きさは厚手の文庫本型であった。ちなみにある年の内容を例にあげれば、余白を埋める装備写真・山の天気図・グラフ・山の装備品・山の気象・山の医学知識・山の動物・山の植物・山の唄・山の文学・世界の山・日本の山・山と人生・山小屋一覧・登山行程表・難読山名・山岳高度表・地形図一覧表

などはもちろんのこと、盛りだくさんのそこそこの辞典でもあった。

紙質が厚いため不要の部分があつても、私自身日記は別に記してもいいので、キジ紙の代用にはならなかったが、珍しい山行のりのスタンブ押しには格好のスペースが得られた。日記帳だから私が毎年更新するかというと思う。便利帳の故を持っていたので二、三年に一度も購入すればそれでも十分に間に合う代物であった。

夢よう一度と願つても、いくら編集が日本山岳会であつても、所詮販売は企業活動だっただけに過当競争に勝つことができず、消え去る運命にあつたのだろう。昭和六十年(五〇輯)版までは通常のまま推移していたが、翌年分は小型に縮刷され、しかも二年分合併されてしまった。その翌年からはもうじて命脈を保った小型の通年版であつたので、都合五十二冊の運命で終わってしまったのであるらしい。中には編集のみで終わった年もあるかもしれないが。私は入会以来この『山日記』が存在していた間中、山登りをすることができた幸せ者であつた。老兵は死なずだけでも困るのである。再び魅力に満ちた『山日記』をよみがえらせて、現代人にも便利さを十分味わせてやれたらなあと思う。

「水雲山三峠大権現」を捜す

長澤 洋

梅雨時分、山本健一郎さんから突然電話がかかってきた。大幡から本社ケ丸に登ろうとして霧で径を失い、水雲山と彫られた石碑のある未知の山にたどり着いてしまったがご存知か、という内容だった。聞けば山村正光さんや横山厚夫さんにも尋ねたが、わからなかったらしい。このお二人が知らないことを僕が知っているはずもなく、三ツ峠の近所に住んでいるからという理由で、山本さんとしては藁にもすがらる思いだったの

だろう。しかし、藁なりに考えてこ

う回答した。

山本さん一行は御巢鷹山から清八峠に至る尾根のどこかに登りついたのである。地形図ではこの間の径は主稜線を外れないが、実際は標高一五〇〇メートル付近前後の標高差一〇〇メートルくらいの間は径が尾根から外れてつけられている。その間に水雲山なる山があるとすれば、それは山本さんの測った高度や明確な尾根上の径らしきものはなかったという話とも一致する、と。

しかし、それは突兀とした岩山だったというではないか。地形図上そんな突起はそこには見当たらないし、

●新ハイキング選書●

●第20巻好評発売中●

一等三角点の山々

山口ゆき子/横山 隆/高柳生雄/川越はじめ/
岡村美邦共著

A5版・310頁・定価1680円(税込)掲載の山 80山

新ハイキング社の一等三角点の山シリーズの三部作「一等三角点の名山100」「一等三角点の名山と秘境」「一等三角点の山々」も発売中

※3冊とも山は重複していません

●日本山岳会選定●話題の本●8刷増刷

日本300名山ガイド

〈東日本編〉〈西日本編〉

市川静子、岡田敏夫、岡部紀正 A5版・320頁

川越はじめ、廣澤和嘉 共著 定価各1680円(税込)

※著者はすべて日本山岳会会員です

新ハイキング社 東京都北区滝野川 7-6-13

☎(03)3915-8110 振替 00130-9-146915

山のイラスト通信・ひとり画展

豊田時男

各地の山々で出会った仏像、深山の伝説地を訪ねた時の出来事を“ひとり画点”して描いたイラストカードです。



あるとも思えない。

そんなことでその後も水雲山のことが頭の片隅にわだかまっていたのだが、八月のある日、何気なくめくっていた山溪の『日本の山一〇〇〇』の三ッ峠の写真に、御巢鷹山から北西に派生する尾根にちよつとした突起があるのを見つけた。今まで何度となく見ていた写真だったので、それまでは気にもしなかったのである。

これは怪しいと思って、山本さんに伝えたと、山本さんもピンとくるものがあつたようで、十一月の末に再訪したいので一緒にいかがかとのご返事があつた。残念ながら仕事の関係で都合がつかず、お断りするしかなかったのだが、自分もその場所

を確認したく、十月の末一人で出かけることにした。

まずは御巢鷹山に登り、その突起まで下降しようという作戦である。

霧の濃い日だったが、三ッ峠裏登山口から八丁金ヶ窪沢を、これも以前から一度行きたかった茶臼の滝を見物しつつ溯り、御巢鷹山にたどり着く頃には幸い霧も晴れてきた。

頂上からは現在の北口ルート、四十八滝へ向かう径があるのだが、荒れに荒れて、道標はところどころにぶら下がっているものの径形すら定かでない。ままよ、とばかりに急斜面を木につかまって東にトラバース気味に下っていったら、木の間越しに目指す突起が見えてきた。

元氣百倍 その突起のある尾根へ

首尾よくのつたら、後はあるかなしのかの踏み跡をたどるだけだった。近づくにつれ、それがいかにも山本さんの言うとおりの岩山だということがわかってきて、これが水雲山だとの確信は深まった。

数メートルの岩場を登ると頂上だった。山本さんに聞かされた光景がそこにあった。ただし今日は多少なりとも遠望がきく。鶴ヶ鳥屋山、本社ヶ丸、滝子山、御坂主稜の山々。冬の晴れた日ならば、南アルプス、八ヶ岳、北アルプスの白屏風が並ぶのではないだろうか。

表に「水雲山三峠大権現」そして横に四人の世話人の名、裏に石工と神主の名が彫られた石碑。それを護るようにその大きさに合わせて作られたのだらうトタンぶきの祠。ブリキでできた箱には「昭和四年七月吉日 登山者芳名簿 三峠北口保勝会」と書かれている。あたりにはその名簿が散乱していた。古くは昭和十一年から新しくは二十七年までの日付があつた。そのほとんどは消えかかっている。麓の、今はない宝鉾山の人々も登ったらしい。徴兵検査を終えて登る云々の文字も。遠く岡山に住所も。半世紀の歳月を越えてこんな名簿が風雪雨厳しいこんな場所に残っていたのはほとんど奇跡ではないだろうか。

触るそばからポロポロと崩れるノートの残骸をこれ以上風化させるのも惜しく、持ち帰ることにした。

宗教登山の時代から近代登山の時代へ、そしてまったく忘れ去られた現在のこの場所。山の形こそ変わっていないが、そこに至る径の栄枯盛衰に想いが至り、感慨深いものがあつた。山本さんたちのおかげでとてもいい場所を知ることができた。それにしても不可解なのは、戦前のガイドブック、鉄道省の『中央線に沿ふ山』には明らかにこの尾根を経て御巢鷹山に達しているルートが書いてあるのに、水雲山にはまったく触れられていないことである。名簿に多くの人の名が残されている以上、何らかの資料を参考にしてその人たちはここまで登ったはずであり、それを見てみたいものだ。会員諸氏に、ご存知の方がおられたらご教示いただきたい。

さて、水雲山の再訪は十一月二十九日、肝心の山本さんは身内のご不幸で残念ながら参加できなかったが、山村正光、山田哲郎、山本稔、藤田礼子、保坂恵子の諸氏が大幅川から先人の足跡を追って無事水雲山登頂を果たした。途中、丁目石の発見のおまけもついたという。忘れられた尾根上の峰も久方ぶりにさぞにぎわったことだろう。

図書受入報告 (1999年1月)

著 者	書 名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈／購入別
藤井寿夫	中央線の山を歩く (新ハイキング選書 No.21)	284pp/21cm	新ハイキング社	1998	出版社寄贈
檜山岳洋	潮風と山霧の細道	306pp/20cm	成山堂書店	1998	著者寄贈
山尾三省	ここで暮らす楽しみ	335pp/20cm	山と溪谷社	1999	出版社寄贈
昭和山岳会 (編)	より高くを求めて (昭和山岳会・創立60周年記念誌)	471pp/26cm	昭和山岳会	1998	発行者寄贈
西丸震哉	滅びの大予言：後戻りのきかない滅亡の台本	206pp/19cm	三五館	1998	著者寄贈
小野有五	ヒマラヤで考えたこと (岩波ジュニア新書 No.313)	182pp/18cm	岩波書店	1999	出版社寄贈
吉武玲子	母のおくりもの	305pp/22cm	吉武玲子 (私家版)	1997	著者寄贈
新潟県山岳協会 (編)	遙かなり曲阿加吉瑪：1997年チアジャジマ峰登山報告	83pp/26cm	新潟県山岳協会	1999	発行者寄贈
傅先詩 (著) 王郁良 (訳編)	泰山 (タイザン)	48pp/19cm	中国旅遊出版社	1982	高島法男氏寄贈
北京外文出版社 (編)	チベットの新しい姿	117pp/26cm	北京外文出版社	1974	高島法男氏寄贈
地図出版社 (編)	中華人民共和国分省地図集	251pp/27cm	地図出版社	1976	高島法男氏寄贈
W.A.Poucher	The Welsh Peaks [6th ed.] : A Constable Pictorial Guide	426pp/18cm	Constable	1977	高島法男氏寄贈
W.A.Poucher	The Peak & Pennines [2nd Rev.ed.]	420pp/18cm	Constable	1974	高島法男氏寄贈
W.A.Poucher	The Lakeland Peaks [6th Rev.ed.]	422pp/18cm	Constable	1976	高島法男氏寄贈
W.A.Poucher	The Scottish Peaks [4th Rev.ed.]	454pp/18cm	Constable	1974	高島法男氏寄贈
Michel Vaucher	Les Alpes Valaisannes : Les 100 Plus Belles Courses	254pp/27cm	Denoel	1979	高島法男氏寄贈
Walter Pause	Von Huette zu Huette : 100 Alpine Hoehenwege und Uebergaenge	211pp/26cm	BLV	1975	高島法男氏寄贈
Walter Pause	Berg Heil : 100 Schoene Bergtouren in den Alpen	211pp/26cm	BLV	1974	高島法男氏寄贈
Walter Unsworth	Because it is There : Famous Mountaineers 1840-1940 [2nd ed.]	144pp/22cm	Victor Gollancz	1973	高島法男氏寄贈
Jozef Nyka	In the Polish Tatra Mountains	143pp/17cm	Interpress Pub.	1971	高島法男氏寄贈
Alan Hankinson	The Mountain Men : A History of Rock Climbing in North Wales	202pp/23cm	Heinemann	1977	高島法男氏寄贈
W.H.Murray	Mountaineering in Scotland [New ed.]	252pp/22cm	J.M.Dent	1962	高島法男氏寄贈
Reinhold Messner	Due e Un Ottomila : dal Lhotse all'Hidden Peak	260pp/21cm	Dall'Oglio	1977	高島法男氏寄贈
V.Adamec & R.Roubal	Vysoke Tatry : Turisticky Sprievodca	195pp/18cm	Sport	1974	高島法男氏寄贈
Jaroslav Iwaszkiewicz	Gory Polskie : W Fotografii Artystycznej	/28cm	WSTEP	1973	高島法男氏寄贈
Miroslav Kukacka	Vysoke Tatry	/28cm	Osveta	1975	高島法男氏寄贈
I.M.F.	The Indian Mountaineering Foundation Information Handbook 1998	87pp/22cm	I.M.F.	1998	発行者寄贈
M.& E.Landes (eds.)	Alpenvereinsjahrbuch Berg '99 (Band 123, 1999)	320pp/27cm	D.O.A.	1998	発行者寄贈
	D.O.A.: Deutschen und Österreichischen Alpenverein				

図書紹介

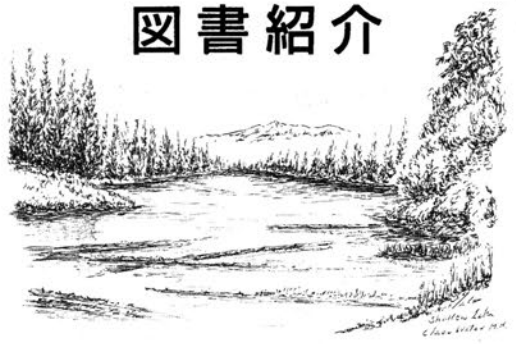


イラスト 陣谷益雄

昭和山岳会・編 『より高くを求めて』

昭和十三年に創立され、今年で六十周年を迎える昭和山岳会が、記念のエベレスト登山とともに刊行したのが表題の書である。

編集子は、「戦後の昭和二十二年以降の活動を会報に基づいてまとめたいもの」とし、五十周年記念誌『歩み続けて半世紀』の続編、その後の補完と位置づけている。だから戦前の記録と戦後の大きな山行が重複のため割愛されている。

読む側としては、これだけの重量本に、昭和山岳会の歴史の半分しか詰まっていなると残念だが、

戦後のアルバムやページのほとんどを占める昭和五十年代までの活動報告は記録価値が高く、面白く読めた。

(大蔵喜福)

一九九八年十月 昭和山岳会(六十周年記念誌委員会) 発行 B5判 四七一ページ

尾崎 隆・著

『幻の山・カカボラジ』

―冒険家族・ミヤンマーの最高峰初登頂―

第一回植村直己冒険賞受賞者である著者は一九五二年生まれ。一九八〇年エベレスト北壁初登攀など八千メートル峰六座に登り、家族と共に世界の秘境・辺境に地球の不思議を求めて挑む冒険一家である。

近年ヒマラヤの東が話題となっていて、ミヤンマー最高峰カカボラジ(五八八メートル)は植物学者キングドン・ウオードが一九三九年ガムラン川上流から南面を偵察して「ビルマの水の山」を著し、十年後にビルマ国軍ソーミエ大佐隊が北面より偵察している。今回はその北面ルートに登っている。

この地域はカチン州最北部でカチン民族解放戦線と軍事政権との紛争の地である。最近和平の合意が成り、政府は山麓の観光開発に力を入れは

じめた。一九九五年一月、入山申請のあった尾崎ファミリー、一橋山岳会、デンマーク隊、シャートン隊、四者平等に入山許可を与えた。

尾崎隊は国軍の意向を汲んで三国友好登山隊(日、仏、ミヤンマー)とし、二月に偵察山行、五月登山技術の研修、七月八月テレビ朝日の参加も得て、五一〇メートルに到達。翌一九九六年九月十五日、CⅢ五四〇メートルから初登頂に成功。

話は冒険物語として展開して、幻が、夢が現実となる過程に愉しみがある。

(三沢 一三)
一九九七年七月 山と溪谷社発行 二二九ページ 千九百円

山崎祐子・野村みつる編

『丹沢 山のものごと』

平成十年の国体で山岳競技の会場となった秦野市が、これを契機に発行したもの。自治体発行のものとは思えない楽しい本に仕上がっているのは、丹沢の麓に育ち、丹沢を知り尽くし、ここをこよなく愛している人たちの執筆になるからだろう。筆者たちが、大山の盆山の行事をきっかけに丹沢にのめり込むようになったと述べているように、ここにはまだ民俗的な行事が十分に残っていた。その山裾に東京からの電車が走る

ようになると、都会からどっと人々が押し寄せ、山小屋が次々と建てられていったが、林道の開発と車の発達で日帰りの登山が主流となり、小屋はさびれていく。

それとは反対に、首都圏からの手ごろな山として登山者はますます増え、オーバークースや環境破壊が問題になってきて、まさに現代登山の縮図を見るようである。このように多くの難題を抱える丹沢が、よりよい山に変貌するようにとの願いを込めて、歴史や動植物、ゆかりの人々や登山コースを含む丹沢のすべてを紹介している。

(泉 久恵)
一九九八年九月 秦野市発行 二一八ページ 秦野市情報課へ
TEL・〇四六三―八三―八三八〇

トモ・チェセン・著／近藤等・訳 『孤独の山』

―ローツェ南壁単独登攀への軌跡―

トモ・チェセンがローツェ南壁をソロで登るという快挙に、世界が驚き、沸いたのが一九九〇年。しかしその直後から、フランス登山界の内部で疑惑が囁かれはじめた。

この本は、チェセンから九一年の秋に原著『SAM(単独行)』とともに託された英仏両国語訳のテキストトから訳者が五年前に訳したが、

疑惑の発生、チェセンの反論など、事態がしばしば流動したため出版が遅れ、今になってしまったという。

この本の中には、常に世界の第一線に目をむけ、自らも長い間日本の登山界をリードし、今は帰らぬ人となった小西政継氏の遺稿「ヒマラヤ・クライミングの進展」…アンナプルナ初登頂からローツェ南壁まで…という解説と、「疑惑の系譜」として池田常道氏が、トモ・チェセンをめぐる論争の経過を五一ページにわたり補遺として載せている。チェセンはローツェ事件以後遠征には出かけていないという。真実は何処にあるのだろうか。

(渡邊玉枝)

一九九八年十月 山と溪谷社発行
二二二ページ 千九百円

根深 誠・著

「シエルパ」 ヒマラヤの栄光と死」

本書は、一言でいえば「歓喜に満ちあふれ—中略—希有な自然は自智を超えて無慈悲である、と同時に慈悲深い」という著者のヒマラヤへの哀惜の念を横糸にして「ヒマラヤ登山黄金時代」に活躍した、ダーズリン・シエルパの「生と死」を縦糸として、新しい視角からヒマラヤ登攀史を書き下ろした野心的な一書であ

る。著者のシエルパの「生きぬいてきた姿のいたましさに触れ、愛しささえも感じた」という思い、それが類書をみない、人の「ごころ」に深く残るヒマラヤ登攀史を創りあげたともいえる。

自らヒマラヤニストである根深氏は、岳友アヌー・シエルパと共にヒマラヤ黄金時代に「栄光」に輝いたダーズリン・シエルパの「個人史」を、関係者あるいは本人からの「聞き取り」によって、彼らの生涯を丹念にたどっていく。さらに、それらをティルマン、シプトン、ラトレッジ、そしてエルゾークという伝説的な西欧アルピニストの『著書』からの叙述と比較しながら、その偉大なシエルパの業績の「正しい」史的位置付けを果敢に試みた。

第一章、思い出は、人類初の八千メートル峰「アンナプルナ初登頂」のサーダー、アン・タルケーの生涯の地を訪ね、令息ロブサン・テンジンとの対話によって、彼の生涯、テンジン・ノルゲイとの関係にも触れ、ヒマラヤン・クラブ黄金時代のシエルパ像を描いた(第二章、第三章)。テンジンの出自、ダーズリン・シエルパ時代の生き残りの英雄、ダキ・バブ、パサン・プタールとの語らい、第四章、第五章では、一転して、現代のソル・クーンブへと目を転じ、

一九五三年エベレスト初登頂、日本マナスル登山隊関係のシエルパとの対談を経て終わる。シエルパは「山を登ることを好きでやっているわけではない」ということだ。

端的にいえば、本書は一言片句も省くことができない問題提起にあふれ、単なる「シエルパ個人史」ではないということ銘記したい。

(湯浅道男)

一九九八年九月 山と溪谷社発行
二七八ページ 千七百円

法政大学体育会山岳部

「山想」第九号

法政大学山岳部部報『山想』の第九号が発刊された。前号の発刊から八年目である。編者は本号を、第十号発刊(山岳部八十周年記念号予定)のつなぎとして編集したとあるが、五百ページを超える大部冊となっている。

部報の主要内容となる山行・遠征記録関係は、まず国内関係を、「積雪期合宿」と「国内山行」に、また海外関係を「海外部活動」、「八千メートルの山」、「個人参加の海外遠征」に分類し、その活動記録がそれぞれ報告されている。

国内の「積雪期合宿」はいずれも少数部員による冬山合宿の報告であ

るが、なかでも長期入山による南アルプス全山縦走の二編の記録はわれわれを大学山岳部の原点に触れさせてくれる。

一方海外の部では、合同パーティー、個人参加の記録が目立つなかで、部独自のものとして創部七十周年記念海外遠征として実施した記録「チョー・オユー全員登頂」が本号にいつそうの重みを加えている。

特集は「大学山岳部の未来を見つめて」と題し、七大学山岳部の指導者による座談会である。大学山岳部の抱える課題、展望を大いに語り合っている。

さらに本号で注目すべきは「リポート」の章に収録されている法政大学山岳部の創立日、部歌、コールなど五十嶋氏の調査、執筆になる一連のもの、および年報の過去の欠落部分の追録である。これらは部活動の周辺のを正確に整理記録し、後輩に引き継いでいこうとする現われで、地道で良心的なその編集姿勢は立派だと思ふ。

本号はこの他、OBたちの随想、前号以後の追悼、年報(一九八九、九七)、行事および庶務記録がそれぞれ収録されている。(松家 晋)

一九九八年十一月 法政大学山岳部山想会発行 五二七ページ

会務報告

【一月理事会】

日時 平成十一年一月十三日(水) 十
八時三十分～十九時四十五分
場所 日本山岳会会議室

【出席者】 斎藤会長、小倉、大森、竹
内各副会長、吉永、田邊、伊丹、熊
崎、絹川、勝山、村井、飯田、鯨坂、
増山、森、大蔵、宮崎、坂本各理事、
石橋監事、平山、穴田、長尾、中川、
平野、中村各常任評議員

【委任】 宇田川理事、神崎監事

○議事に先だち、会長より新年の挨拶。次いで二十七年間勤務され一月三日付けで定年退職となった杉山都子さんに退職金を手渡され、理事会一同が長年の功績に謝意を表した。

【審議事項】

一、ガンカープンスム峰登山隊の件
大森副会長

実行委員会が開催され、吉永理事の実行委員辞退の要望を承認。補充委員に神崎忠男監事を考えている。

隊員については選考中で、二月理事会に諮り承認を得たい。

二、上高地山研水力発電の件 坂本
実行委員会が活動を始め、一月四日現地を調査。四月に着工し、六月

ウエストン祭頃竣工したい。神奈川工科大学との共同研究とし、一月十八日、環境庁など現地関係官庁との交渉を行う。

了承

三、「チヨモランマ登山隊報告書」

転載願いの件 絹川

悠々社より、故高見和成会員の遺稿集出版のため、標記報告書中の本人の原稿を転載したいとの申し入れがあった。

承認

【報告事項】

海外登山基金・伊丹

立教大学ガッシェブルムⅡ隊、北海道山岳連盟冬期マナスル隊、本会ガンカープンスム隊の三隊から申請が出ている。また、本会より海外登山の推薦等を受けた隊の報告がはつきりしない、とくに個人として推薦したのに登山を中止した会員には担当理事が対応する。

総務委員会・絹川

山岳保険は三月が更新。加入者が千名を超え、優良団体として最大三〇パーセントの割引、賠償責任は一億円となった。

秩父宮記念山岳賞・竹内副会長

十二月十七日、第一回授賞に伴う諸問題について反省と検討がされた。表彰対象のうち優れた登山活動には種々の意見があり、理事会としても考えてほしい。また運営委員会より直接登山に関する議論をしてほしい

との要望があり、高所委員会が中心となり、本年度の締切である七月末までに話し合いを持つことになった。

また、賞の英文名については、他に秩父宮賞を創設している結核予防会等の名称を勘案し「THE JAPANESE ALPINE CLUB PRINCE CHICHIBU MEMORIAL MOUNTAIN AWARD」とするところが承認された。

ポカラ山岳博物館募金・大森副会長
十二月三十一日締切、一月七日現在九百二十九名、二千六百五十八口、千三百三十万九千五百七十七円となり、日山協へ送金、および免税申請についても処理済み。

財務委員会・吉永

第三四半期を終わり、会費収入他順調に推移。年次晩餐会は出席者減少のため、六千六百八十八円赤字に。二月三日までに本年度の収支報告書、来年度事業計画、予算要求書を提出してほしい。

学生部・宮崎

一月十四・十七日、ビーコンを使用した雪崩講習会を早大神の田圃ヒュッテで実施する。

海外委員会・伊丹

二月初旬、日本ヒマラヤ協会の招待で中国登山協会の役員が来日、歓迎夕食会を二月六日に実施するので、交流登山を計画中の学生部の理事が参加する。

ルーム日誌

1月	会報編集委員会
6日	常務理事会
7日	アルパインフォトビデオクラブ
8日	アルパインスキークラブ
11日	生部 総務委員会
12日	アルパインスケッチクラブ
13日	二火会 95同期会
14日	理事会 山の自然学研究会
18日	百年史委員会 自然保護委員会
19日	総務委員会 図書委員会
20日	アルパインスケッチクラブ
21日	百年史委員会 ガンカープンスム準備会
22日	三水会 山の自然学研究会
25日	ガンカープンスム準備会
26日	科学委員会 アルパインスキークラブ 学生部
27日	海外連絡委員会
28日	海外登山基金委員会 資料委員会 水力発電プロジェクト 自然保護委員会 フィルムビデオ委員会 ガンカープンスム準備会
29日	山げらの会
30日	学生部 データバンク研究会 山の自然学研究会

一月来室者483名

INFORMATION



◆第三十回「山岳圖書を語る夕べ」

図書委員会

『ヒマラヤ名峰事典』を初め、多くの写真集および山岳書を上梓された藤田氏の、現地取材にまつわるあれこれ話を話していただきます。ふるってご参加ください。

日時 四月十四日(水)

場所 本会ルーム

演題 カラコルム・ヒマラヤの取材を語る

講師 藤田弘基氏

◆上高地「山研」オープンと五月連休の利用予約について

山研運営委員会

今年は四月二十九日から利用できます。開所から五月九日までの利用希望者は、「利用日、人数、代表者名」をハガキに書いて、直接山研委員会にお申し込みください。先着順に受け付けます。

ただし、五月一日、三日は韓国山

岳会の団体が利用します。

管理人は昨年同様に、木村太郎・弥生夫妻です。

◆若葉会山行のお知らせ

集会委員会

西会津の鏡山と吾妻の一切経山に登ります。

日時 五月二十一(金)～二十三日(日)

集合 五月二十一日 二十三日

東京駅

費用 二万七千円程度

申込 住所、氏名、年齢、会員番号

を明記しハガキで勝山康雄宛

(川口市安行原一二六二―三三五)

TEL・〇四八二―九四九六(四六)

締切 四月末日

*申込者には詳細案内を送ります。

◆資料委員会に新風を

現在、若干の新委員を募集中です。

登山史上の資料に関心があり、毎月午後七時半からの会議などに参加できる方を希望、とくに若い方を歓迎します。

詳しくは担当理事の鯉坂青

青まで電話(夕方以降)でお問い合わせください。

◆ウエストン展へ資料協力を!

今夏、上高地山研ではウエストン

関係の資料展を企画しています。当

委員会では準備を進めています。資

料(たとえば写真、書簡、署名など)

をご所蔵の会員はいらっしゃいます

か。六〇七月の約二カ月間、拝借

させて頂き、資料展に華を添えたいと思います。

・拝借資料の発送・返送の送料・委員会が負担。

・拝借への謝礼ありません。展示品にご芳名をあげ、謝意を表します。

・採否は委員会にお任せいただきます。

なお、事前に担当理事・鯉坂青

TEL・〇三三三六六―三八〇一

にご連絡(電話は十九時以降)いただきます

◆自宅でするトレーニング講座

山げらの会

「楽に山に登りましょう。筋肉痛よ

さようなら」を合言葉に、ス

レッチと道具を使わない筋肉

トレーニングのエクササイズを月一回実施

しています。ぜひご参加ください。

三月三日(水) 十八時三十分～二十時

四月六日(火) 同

五月十七日(月) 同

場所 当会ルーム 無料 参加自由

参加希望者は三井まで

TEL&FAX・〇三三三四五―一五三八八

*軽装、敷物をご用意ください。

◆山本茂富個展

「陽の中で風と遊ぶ」

ヒマラヤの大きさ、そこに暮らす

人々のたくましさ、厳しい環境に負

けない心の温かさを、油彩と素描で

描いた四十点の絵画展です。

期日 三月十三日(土)～十八日(木)

十時～十九時(最終日十七時)

場所 ギャラリー・六左エ門

川越市新富町一〇九(本川越

駅徒歩三分)

TEL・〇四九二―二六六六七六四

問合せ 山本茂富

TEL・〇四九二―五九一六七〇八

■会員異動

物故

牧野茂(八二二二) 98・12・28

堀内章雄(四五八三) 99・1・11

新堀春喜(二一七四) 99・1・14

瀬川忠四郎(九四二二) 99・1・17

三和祐佑(一一一七五) 99・1・31

退会

後藤三知文(一一四八二) 99・1

早良区医師会 山歩き同行会(一二二

〇〇五) 99・1

終身会員

庄司駒男(四八一七) 99・1

日本山岳会会報 山 646 号

1999年(平成11年) 3月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイツ四番町

TEL 東京 (03)3261-4433

FAX 東京 (03)3261-4441

発行者 斎藤惇生

編集人 村井 葵

印刷 株式会社 双陽社